

称号及び氏名 博士(看護学) 浅井 克仁

学位授与の日付 令和6年3月31日

論文名 高齢心不全患者における援助要請行動尺度の開発  
Development of the Help-Seeking Behavior Scale for Older  
Adult Persons with Heart Failure

論文審査委員 主査 箕持知恵子  
副査 細田泰子  
副査 長畑多代  
副査 南村二美代

## 論文内容の要旨

**【目的】** 高齢心不全患者における援助要請行動尺度を開発することである。

**【予備研究1】** 心不全患者における Help-Seeking の概念分析

**方法：** 和文誌と英文誌、計 30 文献を対象に Rodgers の手法による概念分析を行った。

**結果：** 心不全患者における help-seeking の属性として [症状が問題であることの認識] [援助の必要性の認識] [援助を求める心理的コストの解消] [援助源の選択] [援助源へのアクセス] [援助を求めたことの評価] の 6 つのカテゴリーが抽出された。

**【予備研究2】** 高齢心不全患者における援助要請行動の実態に関する質的研究

**方法：** 心不全入院歴のある 65 歳以上の外来通院中の患者 11 名を対象に半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。

**結果：** 高齢心不全患者の援助要請行動の実態として、[心理的負担を解消し、依頼しやすい環境を整える] [援助の必要性和心理的負担とのバランスを考え、依頼や相談を行う] [相手の声掛けや提案を受け入れ、必要な依頼や相談を行う] [療養継続のために必要な知識の習得や環境整備に関する協力を依頼する] [心不全悪化の予防や悪化時の備えのために必要な依頼を行う] [自分の能力の限界を判断し、必要な依頼や相談を行う] [身体の異常を認識し、病院に連絡、受診する] [症状の悪さを判断できず、受診が遅れる] [体調が悪くても我慢して受診が遅れる] [病院や医療者に対する考え方により、十分に相談できない] [自分の価値観から、他人への依頼や相談を控える] の 11 のカテゴリー、34 のサブカテゴリー、114 のコードが抽出された。

**【予備研究3】** 高齢心不全患者の援助要請行動尺度原案の表面妥当性・内容妥当性の検討

**方法：** 修士以上の学位を有し、循環器病看護、老年看護、尺度開発に精通した看護師と研究者、計 5 名を対象に、尺度化した高齢心不全患者における援助要請行動の表面妥当性・内容

妥当性を検討するために、専門家会議を行った。

**結果：**尺度項目の表現修正、統合や削除を行い、[援助を求める際の自身の心理的負担を考慮した行動] [療養生活を適切に行うための依頼や相談] [自身では判断できず、医療の専門家に行く依頼や相談] [心不全増悪時の連絡やそれを容易にするための準備] の4つの下位概念に修正し、49の尺度項目へと洗練した。

**【本研究1】** 高齢心不全患者における援助要請行動尺度の内容妥当性指数 (I-CVI) の検討

**方法：**修士以上の学位を有し、循環器看護、老年看護もしくは援助要請に精通した看護師と研究者、計10名を対象に質問紙調査を実施した。49の尺度項目の下位概念との関連性について4件法で評定し、I-CVIを算出した。

**結果：** I-CVIが0.78未満となった9項目を削除し、40項目へと洗練した。

**【本研究2】** 高齢心不全患者における援助要請行動尺度の信頼性・妥当性の検討

**方法：**心不全入院歴のある自宅療養中の65歳以上の心不全患者270名を対象に、1) 高齢心不全患者における援助要請行動尺度案、2) 日本語版ヨーロッパ心不全セルフケア行動尺度、3) 高齢者用被援助志向性尺度(援助に対する欲求・抵抗感)、4) ソーシャル・サポート尺度、5) 背景因子からなる質問紙調査を実施した。信頼性は内的一貫性(Cronbach's  $\alpha$  係数)と安定性(再テスト法)、妥当性は構成概念妥当性(探索的因子分析・確認的因子分析)、基準関連妥当性(外的基準との相関)を確認した。

**結果：**215名から回答が得られ(回収率79.6%)、203名を分析対象とした(有効回答率75.2%)。項目分析、探索的因子分析により、[療養管理のため援助要請] [症状増悪時の援助要請] [治療に関する援助要請]の3因子16項目が抽出された。Cronbach's  $\alpha$  係数は、尺度全体で0.88、各因子で0.77-0.84であった。確認的因子分析の結果、GFI=0.88、AGFI=0.84、CFI=0.91、RMSEA=0.07の適合度を示した。基準関連妥当性は、セルフケア行動尺度との相関は0.59、被援助志向性尺度の援助に対する欲求との相関は0.35、援助に対する抵抗感との相関は-0.29、ソーシャル・サポート尺度との相関は0.31であった。再テスト法における級内相関係数は、尺度全体で0.89、各因子で0.70-0.90であった。

**【倫理的配慮】**すべての研究は、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会および大阪公立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得た上で実施した(申請番号:2020-24; 2021-40; 2022-216; 2022-227)。

**【考察】** 高齢心不全患者における援助要請行動尺度の信頼性および妥当性が検証された。心不全に必要なセルフケアに関連する依頼や相談内容で構成された尺度であり、心不全に特徴的な尺度であると考えられる。心不全は高齢で発症し、日々のセルフケアの継続に周囲の助けや助言が必要となる場合が多いことから、援助要請行動を定量評価できる本尺度の意義は大きいと考える。本尺度は、高齢心不全患者の援助要請行動の自己評価とそれに基づく看護支援のツールとしての活用、および今後の研究における評価指標としての活用が期待できる。

キーワード：心不全、高齢者、援助要請行動、セルフケア、尺度開発

## 学位論文審査結果の要旨

本研究は高齢心不全患者における援助要請行動尺度を開発することを目的とした方法論的研究である。

概念分析と高齢化心不全患者の援助要請の実態に基づき、尺度原案を作成し、専門家会議による表面妥当性・内容妥当性、内容妥当性指数の検討などを経て40項目の尺度案を作成した。203名（有効回答率75.2%）のデータを分析することにより、信頼性係数や再テスト法による質問紙の信頼性を検証し、探索的因子分析、確認的因子分析、セルフケア行動尺度など3つの外的基準との基準関連妥当性など妥当性を検証し、16項目の信頼性、妥当性のある尺度を開発した。

高齢化とともに増加している心不全患者はそのセルフケアの不十分さゆえの再入院が多く、その支援は国内外において大きな課題となっている。本研究は丁寧な文献検討から、心不全患者の援助要請を、セルフケア行動の一環と捉え、症状悪化受診時の専門家への援助要請のみでなく、日常生活における療養管理も含む、包括的な援助要請行動として捉え、評価尺度を開発した点で、新規性、独創性が認められる。

また、本研究は尺度開発の方法論に忠実に丁寧に研究を進め、対象数や統計解析結果においても根拠にもとづく適切な基準を用いて検討しており、科学的で、適切な方法が用いられている。論文中の研究方法について丁寧に記述しており、研究方法は妥当であると判断した。

倫理的配慮は、倫理審査委員会承認を受け実施し、対象の脆弱性を考慮し、自由意思での参加やプライバシーの保護にも配慮していた。

研究論文は論旨の一貫性があり、本研究の限界を明示した上で、研究の発展性について、慢性心不全患者のセルフケアの一環としての援助要請行動に関わる関連探索研究や本尺度を介入や評価のツールとして用いる介入研究につながる可能性を有し、慢性看護の発展に寄与できる優れた論文と評価できた。

以上のことから、本研究は博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと判断した。